

一人では何もできない。人を信じることから始まる。

総美有限会社(ビューティアトリエグループ)代表取締役会長：田中 千鶴

100年続く会社の礎を築く

「100年は続く会社にしよう」と熱い思いを語る田中千鶴さんは、美容界では栃木県内最大のネットワークを誇るビューティアトリエグループのトップ。140人もに従業員からは母親のように慕われている。48周年を迎え、「年はとりましたが、夢はたくさんあるんですよ」とまぶしい笑顔を振りまき、その夢の実現にエネルギーギンギンに取り組んでいる。

昨年、すこぶる健康であった彼女が、大切な母親を亡くしたこともあって、珍しくインフル



Profile

田中 千鶴 (たなか ちづる)



1937年、東京都生まれ。芸術家の両親の一人娘として、幼少から青春時代を東京と岡山県などの疎開先で過ごす。高校卒業後、美容師をめざし専門学校で学び、東京で何年か仕事をしてから、25歳で友人の店を手伝うために来宇、28歳で1号店を持つ。その後順調に躍進し、現在はビューティアトリエグループ全14店舗の総帥として、アトリエイズムを確立。関連会社総サ・フォルビ(ジャパン美容研究所)専務取締役。

きのメッセージカードを渡すのも、そのひとつの現れ。

「今の道標を作ってくれたのは母。母の生き方が影響している」と。焼け野原で、自分たちの少ない食料を他人に分け与える母親の姿から、愛や人との絆など多くのことを学んだ。そして、「女性も働く時代が来る。何か手に職をつけてね」という言葉に、「ぶきつちよな自分ができるのは、日々伸びる髪なら気に入ってもらえなくてもなんとかなる」と、そんな単純な動機で飛び込んだ世界。

チャレンジ精神旺盛、決めたらあらゆる手を尽くして実行する粘り強さを持つ彼女は、昭

愛のあるおもてなしの場

エンザを患い半年ほど静養。出社すると、1号店『ビューティ・マリモ』のモノクロ写真が壁に掲げられていた。「原点を忘れていないんだなあ」と、昨年9月、写真を飾った長女に社長職を託し、自分は会長に就任。

肩書きで呼ばれることを嫌う千鶴さんの目指してきたものは、お客様の「顧問美容師」になること。「お店は、おもてなしの場。技術はもちろん、感動を与え、愛の精神で行う仕事」と。お客様一人ひとりに季節の花を添えた手書

和38年、日本が終戦後の物のない時代から高度経済成長を始める頃、28歳で、しかも結婚式を挙げた2週間後に、自分の最初の店『ビューティ・マリモ』を宇都宮市江曾島に開く。「お店を持ったら、夢はすこく大きくなった」そうだ。お金も担保もないのに「元気な私を信用して」と銀行から多額の借金をして2号店を街の中心部に出す。斬新な発想と行動力、粘り強さと度胸の良さは、脱帽もの。

32歳の時、23日間かけて、イギリス・スイス・ドイツなどヨーロッパ視察の旅にでる。その頃、ロンドンでは、ヴァイナルササーンが流行していた、「すっぴん」カルチャーショックでした。独身

だったら、帰国せずそのまま留まっていたかも」と振り返るほど。技術もさることながら、頭、爪の先から足元まで美しくするのがヨーロッパスタイル。そして、完全ウエルカム(歓迎)の姿勢。それが、彼女の目標になった。さらにパリで、美と夢を追求するアーティストたちが集う工房(アトリエ)に感銘したことから、「ビューティアトリエ」という店名が誕生した。

それからは、お客様の一人ひとりのニーズに応えようと、テイストの違うお店をどんどん立ち上げる。時代は、まさにお洒落や美というものに自分らしさを投影するようになっていった。時流にマッチングした千鶴さんの情熱は、とどまることがない。54年にはエステサロンもスタート。一時は全国に150店舗も有り、40代は、美容とエステの掛持ちで全国を飛び回っていた。「いい情報があるとパツと行動しちゃう。それが、若い時の財産」と。とにかく、バイタリテイ溢れ、時間を無駄にしない。

夢は必ず叶う

「人間が好き。スタッフが好き。自分の子どもや孫のようにかわいい」と考える彼女だからこそ、会社のテーマは「家族」。「自分の親だったら、子どもだったら、兄弟だったら、恋人だったら」という視点で接しなさい」と説く。自分自身の失敗経験から学んだ「二人では何もできない。人を信じることから始まる。人は大切」という思いは、スタッフたちの心にしみ込み、確実に伝わっている。その結果、どのサロンでも、同じ技術やおもてなしが受けられるという「アトリエイズム」が確立された。

座右の銘は「夢は自分でかなえられる」「仕事は能力ではない。段取り80%。能力は20%」。大変な時代をくぐりぬけてゼロから出発してここまで築き上げた彼女だからこそ、「ハッピーでいられるのは、小さな積み重ねなのよ」の一言が重い。「仕事が趣味」と言う彼女の、次なるテーマは「地域の活性化」。ヘアースタイルや美の提供だけでなく、心のケア、ひいては地域を元気にすることが願いのだ。